



週続けてで恐縮だが、宣伝をさせていただく。松江歴史館で毎週水曜日午後三時三十分〜四時三十分、「水の都の水曜こども寄席」と銘打った寄席を開いている。もつともこれは、三月までの限定で、その先も続けられるかどうかは未定である。幾分か稽古的なところも含んでいて、子どもたち同士で意見を言い合ったり、私が助言をしたりする。ただ、これがおもしろかったりする。

ある女兒が小咄をする中で驚く場面を演じた。高座を下りて、その場にいる子どもたちに気づいたことを伝えるように促すと、ある男児が言った。

「驚くところをもつと大きくした方がいいと思う」

これは、状況から言って男児の言うとおりで、現実にはあり得ないことが起こるのだから、ただの驚きようでは説得力に欠ける。

「じゃあ、どうすればいいと思う？」

と返すと、「うわっ」と言いながら観客席の上で飛び上がるような仕草をした。よく見えなかったので、高座に上がってみてくれないか、と言うと男児は、何ら躊躇することなく上がっていき、ぼくのセリフに合わせて、「わっ」と叫んだ。着物の裾がまくれて、二本の細い足が剥き出しになって天井に向かって伸びている。勢い余って後ろにひっくり返ったのであ

る。観客席がドツと沸いた。子どもたちも、保護者も、お客さんも一斉に笑った。この日いちばんの爆笑をさらったのは、男児のアクシデントに限りなく近いこの演技だった。

「すばらしいけど、それは女の子にはできないかもねえ」

みんなそんなことを言いながら笑い続けた。男児は頬を紅潮させて高座を下りたが、恥ずかしがるふうもなく、思い切つてできたという高揚感を、浮かべた笑みに残していた。

人前で落語をする、つまり演技するには恥ずかしさを捨てるしかない。しかし、言うは易しでそう簡単ではない。場数を経て、徐々にだれも捨てられるのだが、どこかにきつかけは必要だし、捨て方も深淺様々で、いつまでも捨てきれない子だつていて。男児がひっくり返つたのは、だれにとつても、自分の中の恥ずかしさに向き合う契機になつたかもしれない。こんなやりとりが一年生と幼稚園の子どもの間に起こるのだから、高座の上も下も実に楽しいのである。

毎週同じ時間にできるといふのは、何ともありがたい。ついにここまで来たか、とつぶやいてみたいが、それは先々が見えている場合の言葉。右往左往しているうちにそうなつていたばかりには使えない。

老い老いに
木幡智恵美

24



男は、「アメリカ軍きちにきました。いろいろな飛行機やヘリコプターがありました。日本は戦争をしないと云っているのに、戦車や飛行機を置いて、しかも平気でアメリカに沖なわをあげてるみたいでへんだなと思いました」と、沖繩で目にした現実にも矛盾を感じている。大人と一緒にひめゆりの証言を聞いた娘は、「ひめゆりの話を聞いて、私の住んでいる松江で聞いていたら、こんなに涙はでないだろうなと思いました。沖繩のガマや資料館など、たびたび聞こえる飛行機の音のない所だったから、こんなに現実的に聞こえないだろうなと思いました」という書き出しで日記を綴っていた。沖繩の地に立つて見たり聞いたりしたからこそ。そして、私の頭の中には、ひめゆりの証言をしてくださった方の、何度も発せられた「知らなかつたんです」の言葉が重くのしかかっていた。同じ日本にいなながら、私は沖繩で起きた悲惨な出来事を、そして今なお基地に占められて喘ぐ地元の人たちの苦しみを知らずに過ごしてきた。自分が学生時代を過ごした広島についても、最後に住んだアパートの大家さんの連れ合いが二次被爆で亡くなったことを耳にしたながらも、それ以上掘り下げようとしなかつた。その後、沖繩に関する本を読んだり、広島原爆記念日に平和ツアーに参加したり、数年後には韓国平和ツアーにまで行くようになる。それらの行動のきっかけになつたのが、この夏の沖繩行きだった。

「沖繩平和ツアー」連載が終わる頃から始まつたのが、編集長による「加害者としての私の戦争体験―日本は中国で何をしてきたか」というSさんの講演記録だ。戦争による被害者の中には、自分の経験を語ることに抵抗があり、死ぬまで口にしなかつたという人が多い。まれに何十年経つてやつと重い口を開いて語り部となる人がいる。まして、加害者となる人……。被害者としての語り部になられた人もそうだが、あえて人前に立つて加害の事実を話すという人は、こういうことは永遠にあつてはならないという強い思いに他ならない。沖繩の壕では、中心部に行くほど階級の高い兵士が居座り、住民たちが壕を追いやられ、しまいには集団自決まで迫られたという、何十年も人々が口を閉ざし続けた出来事を思い起こしながら毎号の連載を読んだ。

30代フリーター トランプが、ガザの住民を移住させ、跡地をアメリカの所有にしてリゾート開発すると言い出した。朝日新聞の社説(2月7日)は「『民族浄化』のそしりを免れない」と批判している。

年金生活者 流血の戦争を縮小する代わりに無血の戦争を拡大する彼の戦争観を示すものだ。イスラエルにとつては、無血で「民族浄化」ができるなら、こんな好都合なことはない。トランプと会談したネタニヤフは「歴史を変えうるものだ」と評価したと報じられている(2月6日朝日新聞朝刊)。イスラエルのテレビ局「チャンネル13」の世論調査によると、トランプ案に賛成が72%、反対17%だった(2月7日同朝刊)。

ただし、「実現可能」との回答は35%にとどまり、トランプの「型破りな発想」(ネタニヤフ、2月6日同朝刊)は、最初に大きく吹っかけて相手の譲歩を引き出す彼一流の「ディール」と見られているようだ。

トランプ自身も自分の言ったとおりにだからといって、ロシアに対してはどんな犠牲を払ってでも徹底抗戦し続けるべきだというのではない。妥協による停戦を正当化し得るのも「人間の『存在の倫理』」だからだ。

30代 トランプはアメリカを再び偉大な国にすると言っている。

年金 近代史を見る限り、衰退した覇権国家が元の力を取り戻した例はない。それでもトランプがそれを主張するのは、中国やロシアの復活を目の当たりにしたからかもしれない。

ウォーラーステインによれば、近代の覇権国家は17世紀半ばのオランダ、19世紀半ばのイギリス、20世紀半ばのアメリカの3国だ。私の理解では、オランダは商業資本主義の段階の、イギリスは産業資本主義の前期の、アメリカはその後期の覇権を握った。このうちオランダとイギリスは現在、大国とさえ言えなくなったし、アメリカはトランプの言う通り「偉大」さを失った。

かつて世界帝国だった中国は19世紀

すんなり事が進むとは考えていないだろう。リゾート開発は将来構想であり、当面はネタニヤフ政権に「流血の戦争」をさせないことに狙いがあると推察される。無血の「民族浄化」をニンジンのように目の前にぶら下げられれば、ネニヤフも戦闘の継続がしにくくなる。トランプはそう踏んでいるのではないか。

30代 トランプがプーチンとウクライナ戦争の停戦に向けて交渉を始めることで合意した、と報じられている。

年金 戦闘による流血の戦争を、ディールによる無血の戦争に切り替え、商売に励もうというトランプの狙いが見える。

西側諸国はこれまでアメリカを先頭に「力による現状変更は認められない」「ロシアのウクライナ侵略は国際法違反だ」といった理由でウクライナの徹底抗戦をあと押してきた。

トランプはおそらくそんな国際法、国際秩序を信じていない。「力による現状変更」によって国家をつくり、パレスチナ人を排除、殺戮し、「国際法に違反」

に帝国主義列強の半植民地となったが、20世紀の辛亥革命、共産革命を経ていま世界第2位の経済大国としてアメリカと張り合っている。東西冷戦でアメリカと世界を2分して対峙したソ連は20世紀末に力尽きて崩壊したが、

して入植地を拡大してきたイスラエルを絶賛支持しているのがトランプだ。バイデン政権も他の西側諸国もイスラエルの所業を容認してきた点では同罪だが、彼らはそれを柵に上げ、ロシアに向かつて「力による現状変更は許さない」「国際法違反だ」と言う。

このことは、西側諸国やそれに追隨する国際政治学者、軍事研究家がロシアのウクライナ侵略を非難するときの論拠にしている「力による現状変更」「国際法違反」といった主張が、絶対的なものでも、ゆるぎないものでもないことを示している。

30代 無法者のやり得が放置されかねない。

年金 私が知る限り、ロシアを非難できる根拠として唯一普遍性をもつのは、吉本隆明が提起した「人間の『存在の倫理』」だけだ。この倫理が帰結するのは「殺すな」であり、ウクライナ国民をいきなり殺し始めたロシアは、仮にその言い分がすべて正しかったとしても、完全にこの倫理に背いている。

その継承国のロシアは低下した軍事力を立て直し、いま世界第2位の軍事大国にランキングされている。

だが、この両国がオランダ、イギリス、アメリカと違うのは、いずれも資本主義が未発達だったことだ。その伸び代を埋め、やがて大国化したのが現在の中ロだ。それは復活というより成長と呼ぶべきだろう。あるいは、未発達、未成長だったからこそ復活できたと言ってもいい。

30代 流血嫌いのはずのトランプが思い描く「偉大なアメリカ」は南北戦争後のアメリカをモデルにしているという見方がある。現在以上の深い分断を乗り越え、帝国主義国家として世界に打って出た流血の時代のアメリカだ。

年金 資本主義の最新の段階、ポスト産業資本主義の段階にある現在のアメリカが、当時のような産業資本主義の段階にあと戻りするのは不可能であり、今後も最先端を走り続けるほかない。それが衰退への疾走になる可能性をほらみながら。

ニュース日記 958
中村 礼治

トランプの無血主義